

短歌

感情 春秋

後藤 康信

ひらひらと若葉ひるがえる谷地には禽獸をこそ遊ばすべきか
夕映えの雲美しと讃ふなれ遲疑のならひぞすべなく今を
げんげ野の彩あでやかに巧めども鬱鬱としてわれは下らず
目に追ひて雲の行方を慕ふとも飛行を強る主観はあらず
いつしかと春の晩きにうつろふを嘆きともあらぬこゝろぐもりや
かゝるとき自己滅盡の理念あれ谷へ飄々とくだりてゆくか
落寞とおもひげさむき宵はさら哭かまく幸の一つだにあれよ
指弾あるそのときもそをあらしめよかくて育くむうるほひもあり
そこはかと秋深みゆく朝夕を何ぞ生きもののくりごと言ふを
彼岸花くれなゐふかく息づくや手脚繚戻の生命も通れ
期しがたき生命ぞとおもふ夕暮を何の暗示となづさふ雲か
秋深く夕庭にしてあるときはすさまじき勢のすぐるとすらし
かまつかの朱深うしていよいよに沈むいのちをむしろ泣かまし

綴方教室

秋の追憶

原田 見正

月のさえた静かな夜、澄んだ空は地上の
青白い光と和して冷たい感じを起させる。
晝間の様に明るい庭も冷たい空気に包まれ
てゐる。時折「キイー」といふ小鳥の鳴聲
があたりの静けさを破つて聞へる。裏山で
は枯葉が風の吹く度に「かさく」 「かさ
く」と音を立てながら散つてゐる。
山里の秋は寂しく吾々の心を深く考へさ
せる、しんみりと獨り考へると次々と想ひ
出多き過去がそれは笑となり涙となつて眼
の前に流れ出て来る。

一昨年の二月

「あゝ見えてもお母さんの病氣は大變悪い
んだよ……」醫者に胃痛と云はれたならそ
れは死を宣告されたのも同様である、現在

はやわれも一つの單位と散るべきぞ日夜ただならぬものどちら過ぐ

すさまじくあるべくぞして四邊には百花撩亂の咲きあるなり

幾何いくげを今は富みたりと言ふべきか夕陽を没るる海にむきつつ

堪えがたくありどをおもふ日日にしてさるすべりの花は無爲に散りつぐ

注射器のただ一つをぞ持ちたえて生きながらふるいのちと言ふや

枯草に五體投げ伏してかくばかり似つかはしげに死にて居りたり

陸橋をわが渡るときいらいらと拳握こぶみらする錯覺さくごくがありき

柵しらみの人の世の變うつさもわかちあひて君とわがうへの秋深みゆく

河原邊

上田 一夫

たゝなはる層雲にしるく影を印し鳶輪を描く晝の河原邊

宵ぬちの街にしありて見上ぐれば望近き月照りてしづけき

朝の陽の竹群透きてゆるゝ光み寺の墓地に想念しづむ

故郷に歩み移して悲しむは昔に變らぬ山の色かも

山嶺の雲晴れゆけば岩肌のたちはだかるが現はれて來ぬ

蟋蟀を窓邊によりて聞きをればさびしらに浮ぶ父の面影

の醫學ではそれは殆んど不治の病とされてゐる。(今、母の病室を出て来て私が、思つたより元氣な姿を見て、この分では……と考へてゐた事も、この祖母の一言は餘りにも辛辣だつた。私は失望のどん底にたゞきつけられて、たゞ茫然として何事を語る勇氣もなかつた。

「きつと立派な者に成つてお母さんを喜ばせてやるのだ。」といふ様な事がある一つの望みともして一年前に母に別れを告げた私が今日この様に變り果てた母に逢はふとは……私は何とも云ひ知れない悲しみに胸がつまる様な思ひだつた。

祖母(母方の)はその十日程前静岡からわざわざ来て母代はりに色々家の中の面倒を見てゐて呉れた。私にとつてはいつもなつかしい祖母であつた、私が身延に學ぶと聞いて誰よりも一番よろこんで呉れたのもこの祖母であつた。その日も温顔に微笑を浮べながらあたゝかく私を迎へて呉れたのだつた。

親が子を看るといふ事に對して不思議は